

物井地区出口・鐘塚遺跡出土の垂飾様石製品について

渡辺 政治

I はじめに

物井地区は、住宅・都市整備公団による土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査として昭和59年度に発掘調査が開始され、現在までに約20%が終了し、先土器時代、縄文時代、古墳時代を中心に多くの成果をあげている。

先土器時代の遺物は各遺跡から出土し、印旛沼南側の同時代を知る上で貴重な資料となっているが、なかでも御山遺跡で検出されたIX層直下の環状ブロック群は、近接する内黒田地区池花南遺跡IX層中部検出の環状ブロック群と共に注目を集めている(註1)。

本稿では、昨年度調査を行い、御山遺跡よりも若干時期的に下降するIX層中の遺物が広く検出され、同層位から装身具とすれば、現在、我国最古と思われる仮りに「垂飾様石製品」と呼んだ有孔の磨製石器2点が出土した出口・鐘塚遺跡(出口部分)について、垂飾様石製品を中心にその概要を報告したいと思う。

II 遺跡の概要

出口・鐘塚遺跡(出口部分)は、印旛沼に注ぐ鹿島川の支流によって開析された支谷の最奥部、小さく舌状に張り出した標高29.5M前後の台地上に位置する(第1図・第2図)。行政的には、四街道市物井字出口1404-1他にある。両側の小枝谷とは約10~12Mの高低差があり、小支谷の最下部には湧き水が現在も湧き出ている。

調査は昭和61年度から開始され、昭和62年度に下層の本調査を行った。確認調査によって第2黒色帯中の遺物が広い範囲で出土することが予想されたため、本調査範囲は細かく分断せずに設定し、セクションについても通常行われている調査範囲の外側の壁を使うのではなく、ブロックの中心を通る様に20Mから30M間隔で東西方向に2本、南北方向に3本のベルトを残すことにした。また、御山遺跡や池花南遺跡の例から環状ブロック群が検出されることも予想されたため、部分部分を掘って埋めていくという方法をとらず、遺物の柱を



第1図 遺跡の位置(1. 出口・鐘塚遺跡・2. 御山遺跡・3. 池花南遺跡) 網は物井地区

全体が掘り終わるまで残して、現場で台地上に広がるブロック群の在り方を確認し、廃棄状態を容易に理解しようとするような記録写真を撮る方向で調査を行った。しかし、実際には、調査が10ヶ月間に及んだため遺物柱の崩壊が激しく、調査範囲を北側と南側の半分に分けて調査せざるを得なかった。

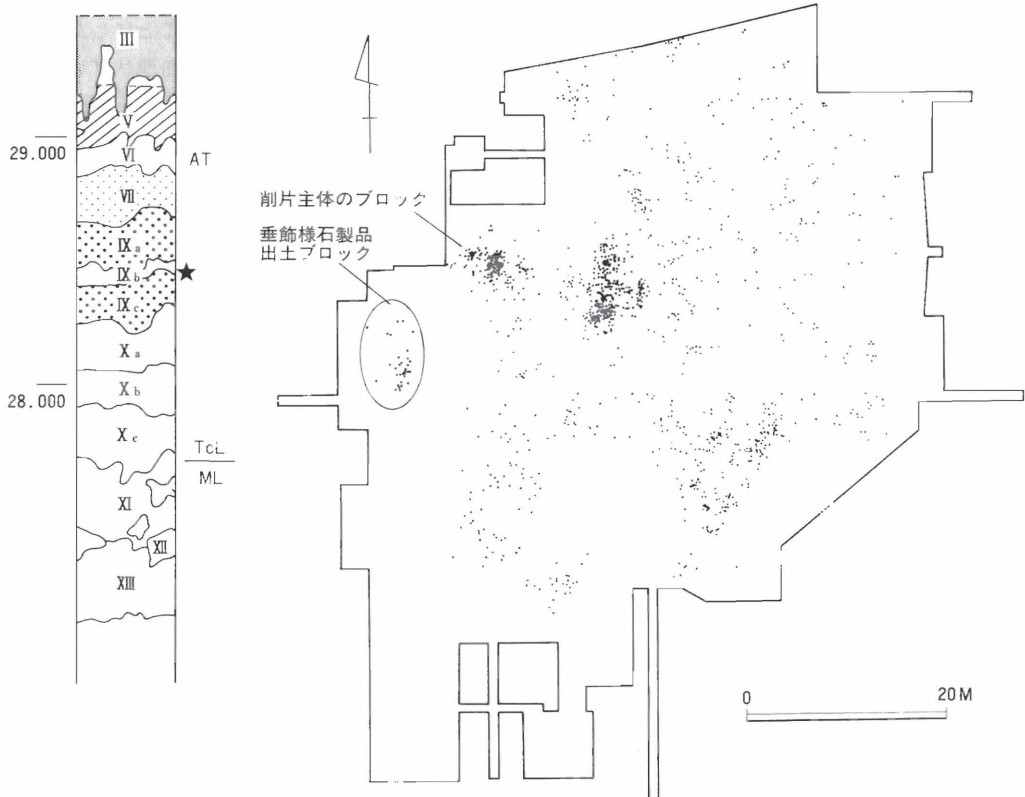
本遺跡の基本土層は第3図のとおりである。遺存状態は全体的に比較的良好であった。VI層（ATブロック介在）は、上下に大きく動いていたが、容易に識別できる鍵層として有効であった。VII層からIX層が第2黒色帯であるが、IX層の中間層（IX b層）は調査範囲の中でも明瞭に認められる部分と、ほとんど認められない部分があった。IX c層の上下の境は明らかである（註2）。

遺物は、IV層からIX層下部にかけて検出された。このうちIX層中の遺物が調査範囲全体に広がりを見せた。遺物の上下動はかなり激しく、同一ブロックの中でも1M近い標高差が見られたが、分布の中心はほぼIX b層直下IX c層上部付近にくるものと思われる。IX層中の遺物の平面的な分布は、現場で見る限り、垂飾様石製品が出土したブロッ

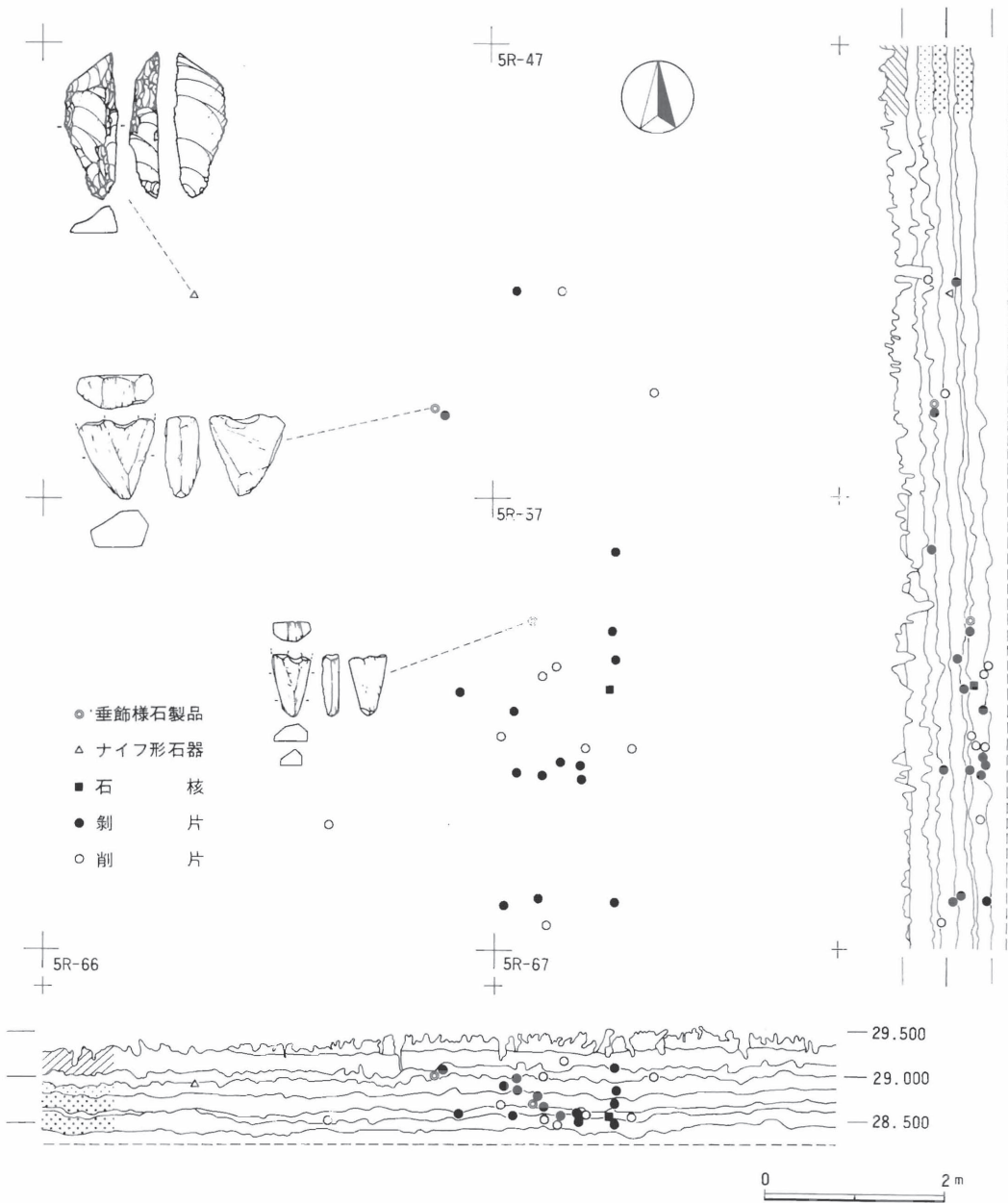
ク、削片を主体とするブロック、遺跡中央西よりの大きなブロック以外は散在しているという感じであった（図3図）。周辺部の遺物は谷の方に流れているともみられるが、土層には大きな傾斜はなく、今後、接合関係や母岩別分類によって、当初



第2図 遺跡の地形



第3図 基本土層・遺物分布図



第4図 垂飾様石製品出土ブロック

から散在していたものか、自然の影響によって動いた可能性が高いのかを明らかにし、散在していたのであれば、ほぼ同層位である内黒田地区池花南遺跡の様に環状ブロック群を形成する遺跡との違いを考えていかななくてはならないと思う。また、今回は調査の手が及ばなかったが、谷底部の状況はどのようなものであったろう。将来は是非とも谷に向かうトレンチを設定してみたい。

III 垂飾様石製品出土のブロックについて

垂飾様石製品が出土したブロックは調査範囲の西側、やや斜面にかかったところに他の遺物群とは離れて位置している。ブロックの大きさは、長軸7M短軸3.5Mでブロックの南側に遺物の集中があり、その北側に5点が散って、やや離れてナイフ形石器が1点出土している(第4図)。

出土した遺物は総数28点で、垂飾様石製品2点の他、ナイフ形石器1点、石核1点、残りは剥片

と削片である。遺物の出土層位は投影図でみるとV層からX層にまで及んでいるが、現場での観察ではVII層からIXc層下部であり、その分布の中心はIXb層からIXc層である。ただ、調査範囲中の他の部分と同様、出土した遺物標高の上下差が激しいことは確かである。遺物の石質は成品を除くと、黒曜石、珪質粘板岩、メノウが1点ずつあり、残りは同一母岩と思われる安山岩であった。安山岩の削片と石核に接合関係がみられたことから、やや離れてVII層中から出土しているナイフ形石器を除けば、確実に同一層中にあったものと考えられる。

垂飾様石製品は、小型の1号が南側の遺物集中部分から出土し、2号は1号から北へ約2.6M離れて出土している。出土層位は1号がIXb層、2号がVII層である。2号の出土層位が高いのが気にかかるが、前述した様に遺物の上下動はかなり激しいので、2号もIX層中にあったと考えてよいと思われる。2点とも今後の検討に備えて遺物の柱から土層サンプルを採取してある。

我国で先土器時代の装身具が出土した例としては、北海道の美利河I遺跡・湯の里4遺跡があるが、いずれも墓墳からの出土であり、中国・ソ連邦でも墓墳から垂飾が出土している例が多いことから本ブロックでも遺構の発見に努めた。しかし、残念ながらそれらしいものは検出することができなかった。また、湯の里4遺跡では垂飾が出土した土壌中からベンガラ(酸化第二鉄)が検出されており、やはり同様の例が中国の周口店山頂洞遺跡などにもある(註3)。本ブロックでは、ベンガラは検出することができなかったが、遺物集中部分の周辺に酸化した鉄分の塊がやや集中してみられた。ただ酸化した鉄分の塊は調査範囲のところどころにみられることから、この集中とブロックとの関連は判然とせず、本ブロックが墓墳であったとは現在のところいえない。しかし、本ブロックが他の遺物の分布範囲と離れた所に単独で位置していることは、その性格を考える上で重要になってくると思われる(註4)。

IV 出土遺物解説(第5図～第9図)

今回の調査によって得られた遺物の総数は2千点以上あるが、それらのうちIX層中部の資料から代表的な石器・石製品を抽出して解説を加えたい。

なお、文化層の設定は行っていないが、ハードローム層上部に黒曜石製の横打削片素材のナイフ形石器を含むブロックが、VI層には、良質の黒曜石や珪質頁岩製の石刃と石刃ナイフをもつブロックがあり、VI層のナイフ形石器の製作地点からは削片を主体とする多量の資料が得られている。以下、解説に用いる番号は図に付した番号と一致する。

1. 垂飾の可能性のある有孔石製品。1号垂飾様石製品と仮称する。孔部から上側を欠損しているため本来の形態は分からない。現存部は三角形の偏平な板状をしている。表面にY字状の稜線があるが、裏面は平坦面である。また、側面にも平滑な面取が認められる。表裏、及び側面は全面に亘って良く研磨されており、幽かに擦過痕を留めると共に、部分的ながら微光沢を帯びている。穿孔部には錐による回転痕はなく、平行条線が密に並走しているところから、穿孔後に細い棒状工具による孔壁の修整が行われているとも考えらる。あるいは、この工程で上部が破碎されたのかもしれない。黒色を呈し、やや粗粒の安山岩、あるいは玄武岩製。表面の一部が茶褐色となっているので、原礫面あるいは風化面に近い部分を素材としている可能性がある。現在長16.91mm、幅10.65mm、厚さ4.83mm、重量0.7g。

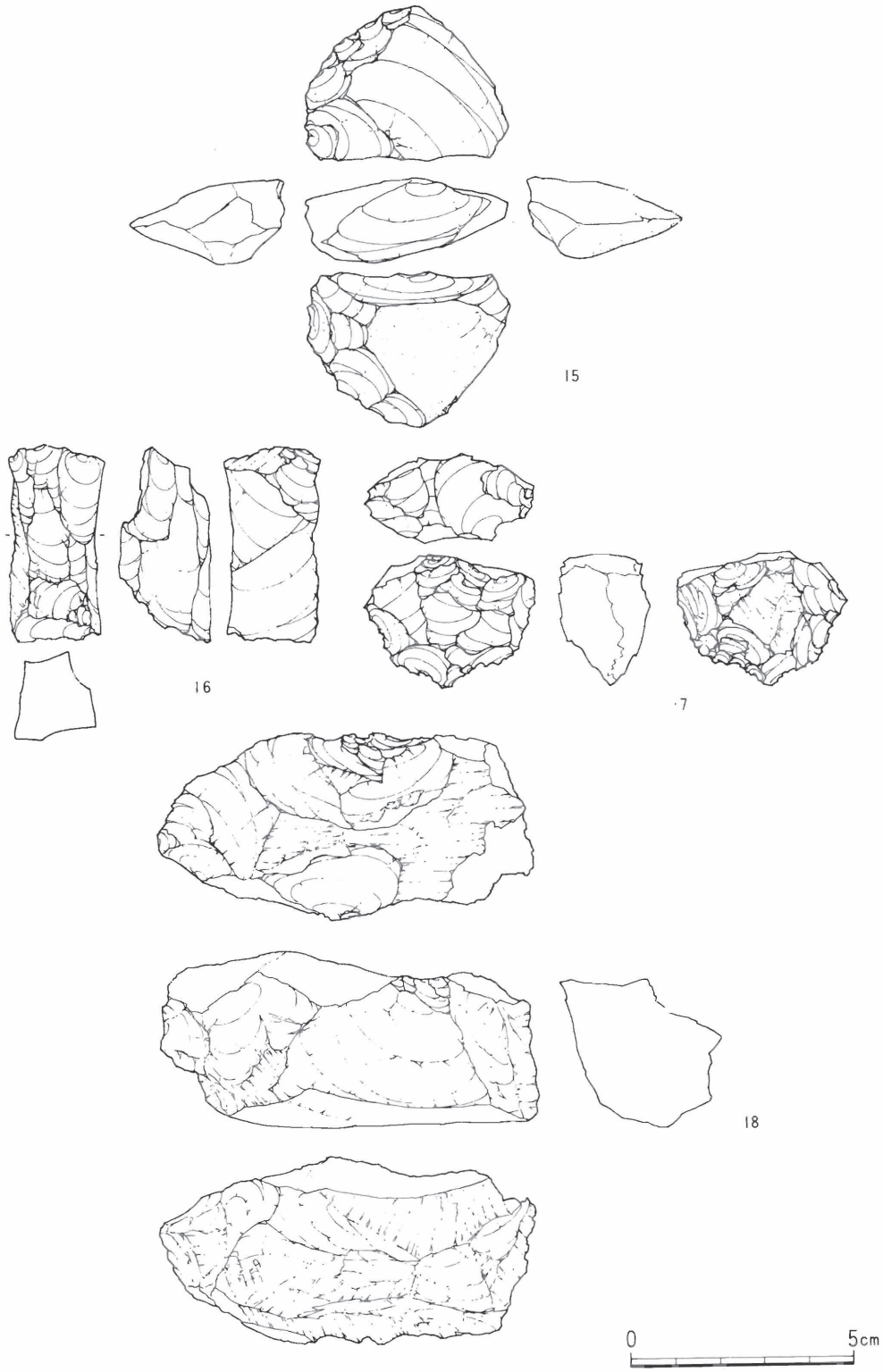
2 やはり1号垂飾様石製品と同趣の石製品であり、2号垂飾様石製品と仮称する。1号に比較すると粗雑な作りとなっているが、大きさはひと回り大きい。遺存部の形態、製作手法、破損状況等は1号と全く同一の特徴を示している。赤褐色のやや粗粒の砂岩製で、現在長22.55mm、幅20.79mm、厚さ8.80mm、重量は2.96gである。

3、暗灰色の珪質粘板岩製のナイフ形石器。背面に原礫面を留める横打削片製である。横長削片を縦に使い、ブランディングにより基部を作出している。腹面左側縁はヒンヅであるが、尖頭部は鋭い。ペン先形ナイフと呼ばれるものも含めることもできよう。長さ42.9mm、幅21.1mm、厚さ6.5mm、重量4.56g。

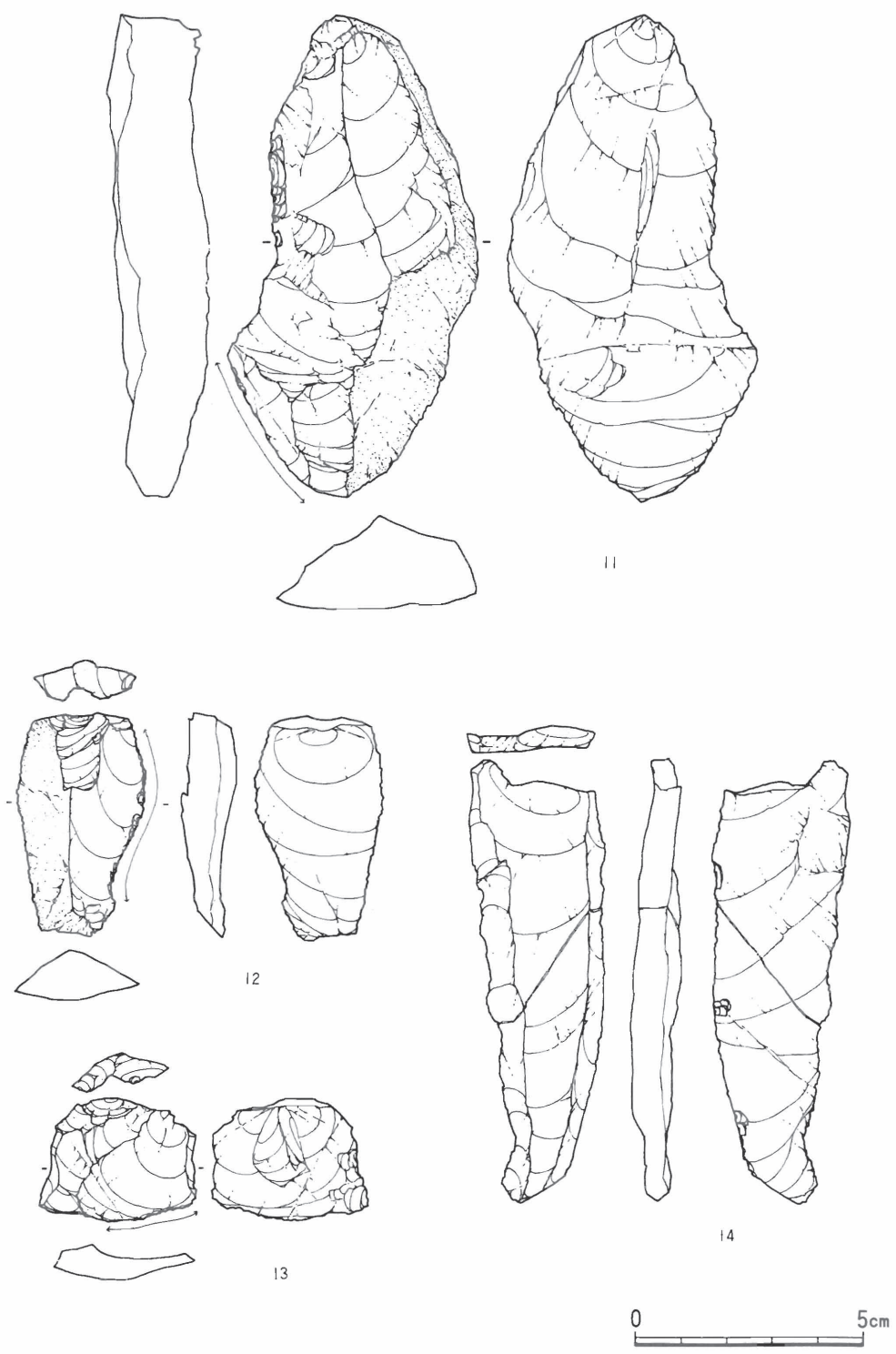
4、淡褐色の風化面に覆われた珪質頁岩製のナイフ形石器。垂飾様石製品に近接して出土しているが、産出層準がVII層上部であり、この層準には同種の珪質頁岩が多くあるので、垂飾様石製品との伴関係は確実とは言えない。縦長削片の基部と側縁部の一部に2次加工が看取される。背稜に



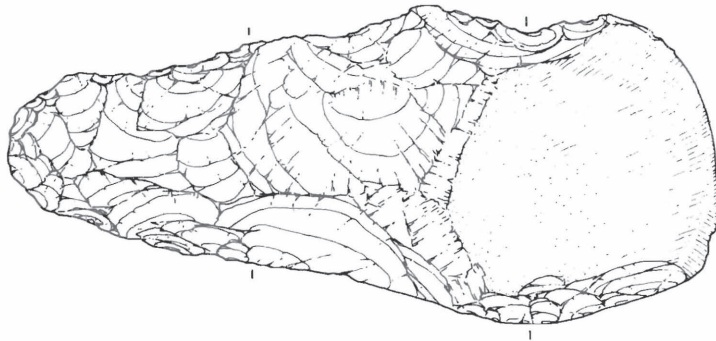
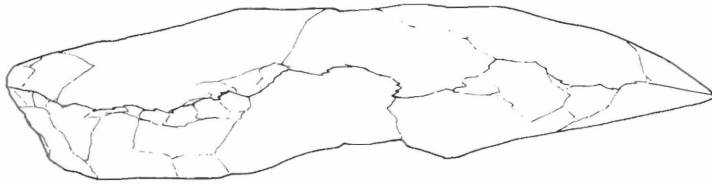
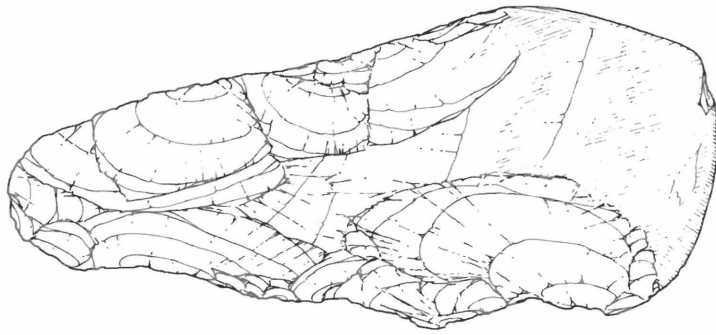
第5図 出土遺物(1)



第7図 出土遺物(3)

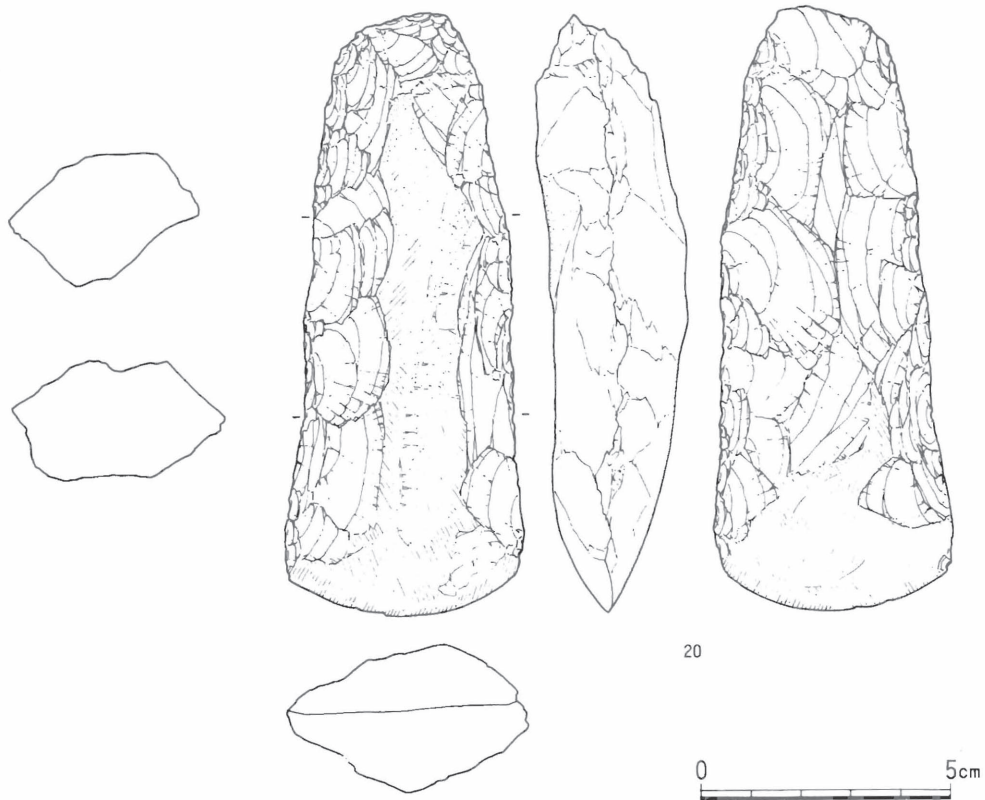


第6图 出土遺物(2)



19

第 8 图 出土遺物(4)



第9図 出土遺物(5)

沿う細かい剝離痕は剝片剝離に先行する石核調整に由来する可能性が高い。長さ39.9mm，幅14.4mm，厚さ7.6mm，重量3.55g

5，所謂台形石器の仲間と見られる。青灰色のチャート製横打剝片の底辺に細部加工がある。細部加工はパイポーラーテクニックの応用で，器体を横にねせ，側縁部の一部をほぼ垂直に加撃している。これを仮に砸撃調整と呼んでおく。背面の左側には打面が残置されている。長さ39.3mm，幅19.3mm，厚さ5.0mm，重量3.00g。

6，5と全く同趣の石器である。黒色緻密質安山岩の横打剝片を素材としている。背面右側に打面残り，これに対応する左側縁に細部加工がある。細部加工は明らかに砸撃調整によるもので，楔形石器のエッジによく見られるような潰れが観察される。台形様石器とナイフ形石器との親和的關係が佐藤によって指摘されているが（佐藤1988），楔形石器との親和性（調整技術の互換的關係）も想定したい。長さ42.1mm，幅16.7mm，厚さ7.3mm，重量4.82g。

7，青灰色のチャート製台形様石器。縦に分割

された横長剝片の側縁部にブランディングによる細部加工がある。背面下半の小剝離痕は打面からのもので，2次加工ではない。長さ28.4mm，幅15.3mm，厚さ7.3mm，重量は3.58gある（註5）。

8，黒色緻密質安山岩の横打剝片の底辺に細部加工のある石器である。縁辺部の刃こぼれを重視し，図のように見ると台形様石器の如くであるが，側削器の可能性も否定できない。長さ28.8mm，幅24.5mm，厚さ12.1mm，重量6.75g。

9，珪質頁岩製の楔形石器である。偏平板状で，各辺に砸撃剝離痕を認める。両極石核というよりもピエスエスキューである可能性が高い。しかし，機能的にはウェッチングに限定されるものではあるまい。39.8mm×3.1mm，厚さ9.1mm，重量11.46g。

10，黒色緻密質安山岩製の楔形石器。原礫面を留める剝片を素材としており，表裏共に上下からの砸撃剝離痕によって構成されている。一側縁に截断面がある。22.9mm×28.3mm，厚さ7.7mm，重量5.64g。

11，暗青灰色のチャート製の剝片。剝片の中で

は最も大型の部類に属する縦長のもので、背面左側縁には使用痕と見られる刃こぼれがある。礫面を大きく残す。石刃とは言えないが並走する背稜が観察され、自然打面からの連続的な縦長剥片の生産が想定される。長さ103.2mm、幅45.6mm、厚さ18.8mm、重量97.47g。

12、暗灰色の地に茶褐色の縞目が入る珪質頁岩製の剥片。背面に原礫面を残す縦長の例で、使用痕が著しい。打面は平坦で背稜上部に小剝離痕がある。長さ50.4mm、幅27.5mm、厚さ10.6mm、重量13.01g。

13、本遺跡で最も一般的な横打剥片の一例である。黒色の珪化した粘板岩を素材に選んでいる。打面は複剝離で、おそらく打面と作業面の入れ換えに由来するのであろう。底辺に使用痕と見られる微細な刃こぼれが連続的に観察される。長さ26.3mm、幅35.3mm、厚さ9.3mm、重量7.84g。

14、ホルンフェルス化した粘板岩製の石刃である。石刃の検出は本例を以って唯一とする。頭部を欠損するが、両設打面の石核から剝離された、背面2稜型の整った例と見られる。尾部端に石核底面の一部が残されている。発掘資料中にこの種の石質は他に認められず、別地点から移動してきたものとしてよい。長さ97.2mm、幅29.6mm、厚さ10.8mm、重量29.46g。

15、トロトロ石（黒色緻密質安山岩）製の石核。端部調整のある盤状横打石核であり、石核底面を切る横打剥片が生産されている。34.7mm×44.51mm×15.5mm、重量20.57g。

16、淡褐色の縞目が平行に走る明灰色珪質頁岩製の石核。小型の縦長剥片が最終的に剝離されているが、90°の打面転位が観察される。44.7mm×19.6mm×19.5mm、重量20.79g。

17、暗灰色珪質頁岩製の石核。表裏に求心的な剝離痕が数多く識別される。上面にも数枚の剝離痕があり、頻繁な打面の転位を特徴とするものである。30.6mm×38.1mm×17.8mm、重量は20.32g。

18、黄褐色を呈する珪質粘板岩の分割礫を横に使った角柱状の石核である。節理面に沿う分割が行われており、節理面を打面とし、打点を横に移動することによって、横長剥片が連続的に生産されている。打面と作業面の位置関係は相対的である。同趣の石核は近接する池花南遺跡に多量にあり、台形様石器の素材を供給している（渡辺修一

氏談）。43.8mm×86.8mm×38.8mm、重量は168.02g。以上の4例によって、本遺跡の石核の変化を代表させることができるが、簡単にまとめれば、多様な横打技法によって支えられた石器群であると言える。

19、比較的緻密な砂岩製の局部磨製石斧。長さ120.9mm、幅47.0mm、厚さ26.9mm。縦長の大型礫片を素材とし、両面を打製し刃部が弧状に開く短冊型に整形している。刃部は両面とも良く研磨されている。側縁にも使用による磨痕がある。

20、やはり緻密な砂岩製の局部磨製石斧。石斧は5個体分あり、大型・中型・小型の別があるが、本例は中型のものに属する。胴部最大幅が刃部両端と一致し、僅かに側縁が外側に開く短冊形をしている。片面に原礫面を留めるが、裏面上部中央に旧剝離面の一部が僅かに残り、また、側面の形状からしても、この石斧の素材が横長の剥片であったことが理解される。入念な細部加工が施されているが、蛤刃状に両面から研磨された光沢に富む刃部は見事な出来栄を示し、本県の数多い類似品中の白眉と言っても過言ではない。また、磨痕は器体中部、両側縁下半にも及び、あるいは着柄時における使用痕の一種とも考えられる。長さ120.9mm、幅47.0mm、厚さ26.9mm、重量193.80g。

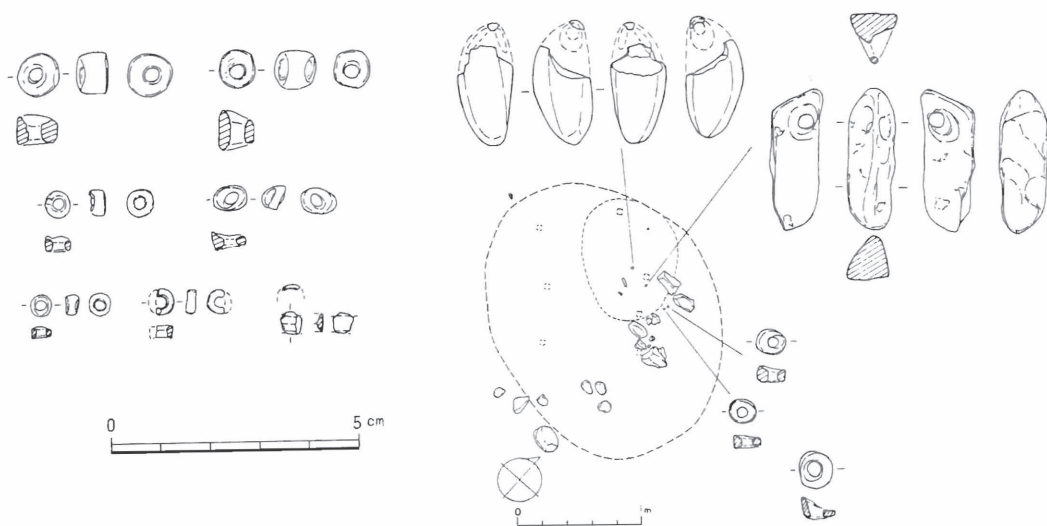
V まとめにかえて

最後に先土器時代の装身具の出土例を紹介したい。我国での出土例としては、前述した北海道の美利河 I 遺跡、湯の里 4 遺跡がある（註 6）。美利河 I 遺跡では、ビーズ状の玉が 7 点、湯の里 4 遺跡では同じくビーズ状の玉 3 点と垂飾品 2 点が出土しているが、2 遺跡とも約 12,000 年～13,000 年前と推定されており、出口・鐘塚遺跡の垂飾様石製品とは年代的に大きな差がある。また、形態的な類似性もみられない（第 10 図）。次に、中国やソビエト連邦の旧石器時代に目を広げると、第 11 図及び第 12 図に示した様な例がみられる（註 7）。これらの中には三角形のものがあり、本遺跡出土例をこの頭部と見ることもできるが、本例のようなカットを施した例はまったく見られない。このことからすれば、現在のところ本遺跡出土の垂飾様石製品を垂飾と断定することはできず、その形態と用途は類例、特に完形品の出土を待って検討しなくてはならない。

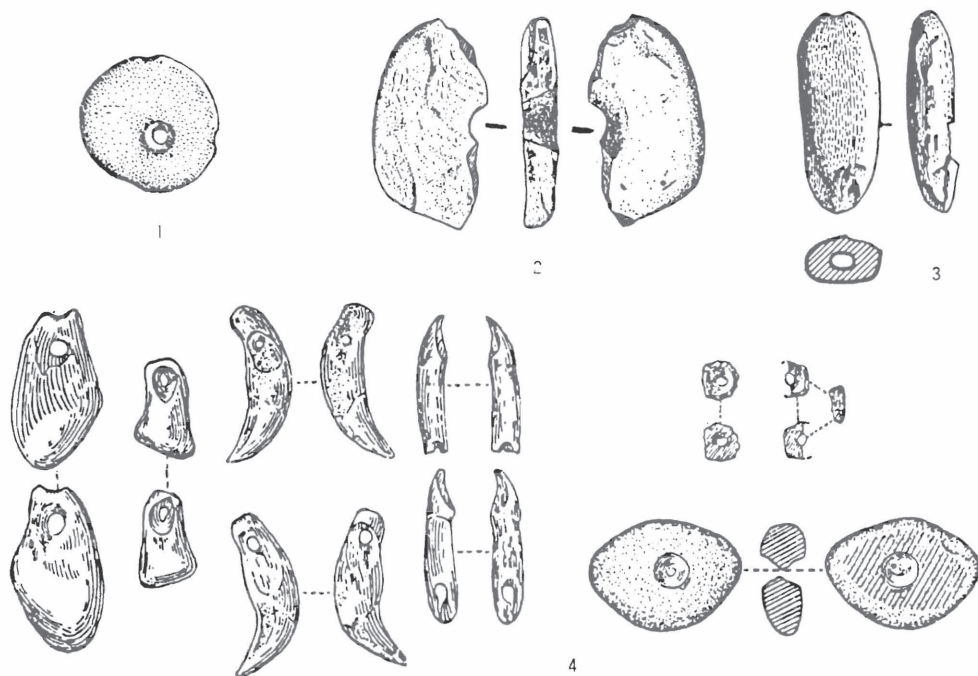
今回報告した出口・鐘塚遺跡は垂飾様石製品のみならず、台地平坦面をほぼ全掘し、IX層の遺物分布の全容を把握しえた点において、また、先述の台形様石器等にみられるように、該期の石器群の変遷を知る上でも重要な遺跡である。今後の整理の結果に期待したい。

末筆ながら、調査方法及び垂飾様石製品について多くの方からご教示いただいた。特に、大貫静夫氏からは種々の御教示を賜った。本稿をかりて御礼申し上げます。

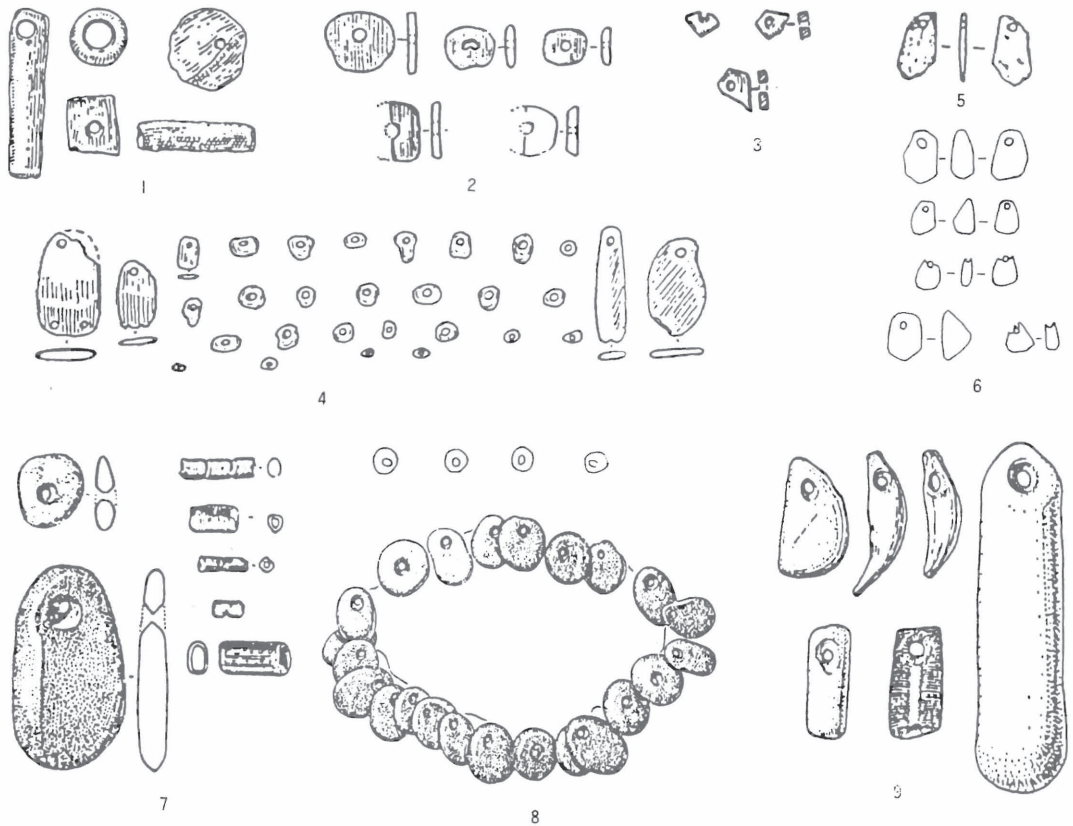
また、田村隆氏には本稿執筆にあたり全面的な協力をいただいた。あわせて御礼申し上げます。



第10図 美利河 I (左)、湯の里 4 遺跡出土の装飾品



第11図 中国の装飾品出土例(遺跡名は註7を参照)



第12図 ソビエト連邦シベリア地方の装飾品出土例(遺跡名は註7を参照)

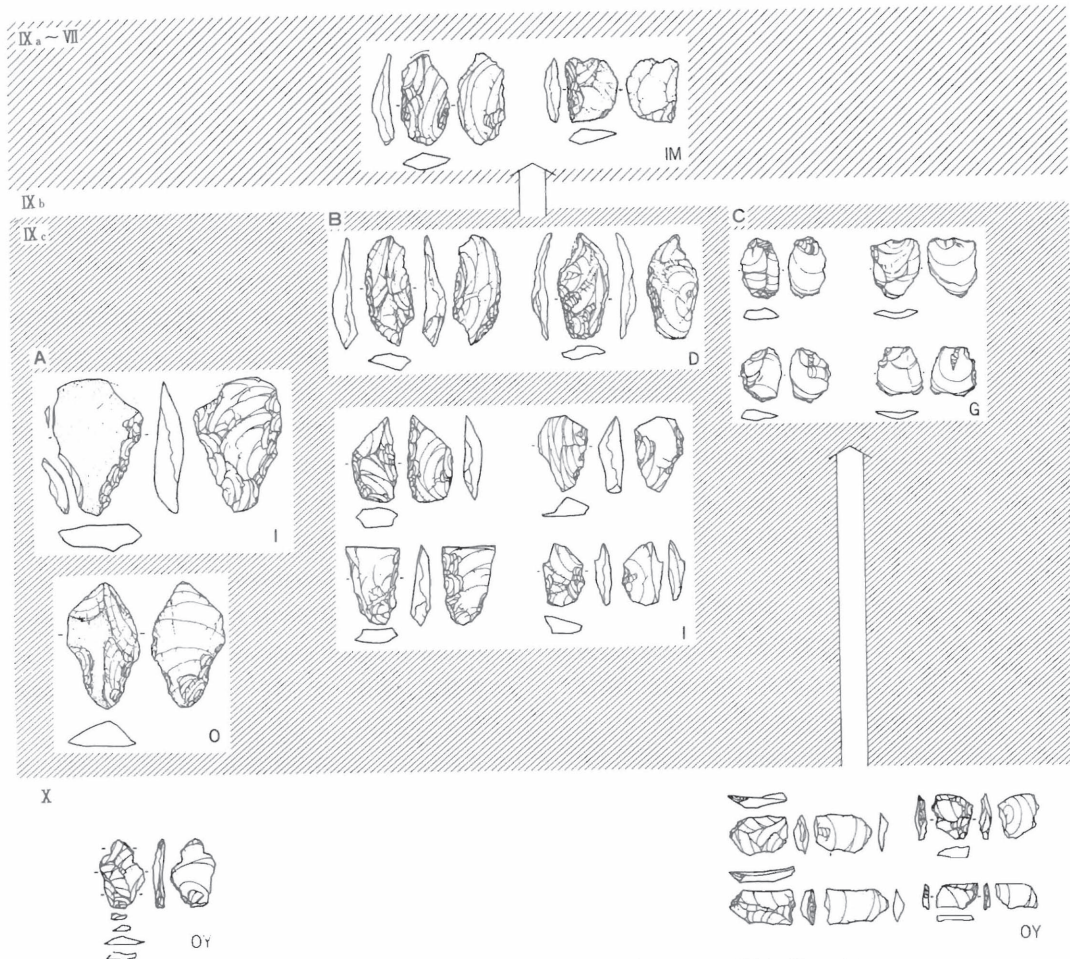
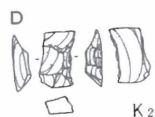
註

- 1) 特に池花南遺跡は、本遺跡とほぼ同一の地層から遺物の検出があり、近接して大規模集落が継起的に形成された可能性が指摘される。今後の整理過程で両者の関係を十分に検討していく予定である。
- 2) 本遺跡の立川ローム層の分層基準は、萱田地区の豊富な実例に基づいた井戸向遺跡報告書に従った。なお、下総台地の立川ローム層の層序区分に関しては、積極的に細分をすすめ、総合的な所見に従って遺跡間の対比を行うべきであるとする立場(橋本 1984)と、あくまで、星谷津遺跡の層序区分をベースとすべきであるとする立場(鈴木 1984)とがある。本遺跡の発掘調査に関しては、下総台地西縁部の基本層序は既に萱田地区で確立された、との判断から、特に第2黒色帯の分層に留意した。近年、同様な堆積状況が県内の広範囲に亘って確認されており、第2黒色帯中石器群の詳しい変化が明らか

かにされつつある。特に、IX b層は将来一種の鍵層となりうる可能性があり、十分な注意が必要である。

- 3) 墓墳からはではないが、岩手県和賀郡大台野遺跡では、有孔円礫が出土したブロック群から雲母鉄鉱の小塊が検出されている。
- 4) 墓墳と推定される遺構は宮城県座散乱木遺跡で注意されているが、大分県岩戸遺跡第7層(岩戸D文化)の集石墓が確実な例と見られる。ほぼAT降下期の所産と考えられており、墳底より人骨片が採集された。副葬品として、スクレイパー、貝殻4点がある。貝殻は、イシダタミ1点、アワビ類1点、不明2点という構成を示している。千葉県内では、千葉市荒久遺跡(1)IX中層からカキの貝殻が出土している(調査担当の山口典子氏の御教示による)。この集石墓に近接して、ベンガラ塗られた「彩色岩隅」あるいは、男性性器を模した石製品の検出もあった。

VI



第13図 下総台地西部における台形石器の変遷(石器:1/3)

OY:御山 O:大堀 I:池花南 D:出口・鐘塚 IM:芋窪
G:権現後 K2:小中台(2)

5) この機会に下総台地西部の台形(様)石器の変遷について簡単にまとめておきたい。比較資料としては、千葉市小中台(2)遺跡(未報告)、八千代市権現後遺跡第6文化層(橋本 1984)、四街道市御山遺跡(千葉県文化財センター 1988)、同池花南遺跡(千葉県文化財センター 1988)、佐倉市大堀遺跡(未報告)、同芋窪遺跡(未報告)を用いた。いずれも当センターの調査によるものであり、権現後遺跡以外は未報告であるが、整理担当者の御好意によって実見、観察のうえ、実測図の一部を転載させていただいた。

各資料の産出層準は大別して4枚に分けることができる。御山遺跡例がX層上部で最も古い。IX層下部には、権現後遺跡、池花南遺跡、出口・鐘塚遺跡、大堀遺跡があり、最も多くの遺跡の集中する層準と考えられる。IX層上部からVII層には芋窪遺跡があるが、遺跡数は激減する。参考資料としてあげた小中台(2)遺跡例はVI層の検出であった。各遺跡の台形石器を分類すると、大きく4種に分類することができる。(A)基部調整型とする。縦長の剥片の打面部側に細部加工を集中して基部を作出するもので、鏢型を呈するものが

多い。剝片製尖頭器の仲間で、先端部には未加工の刃部を残している。(B)側縁調整型とする。主に横打剝片を素材として、打面部に対応する側縁に細部加工を集中する。所謂切成形石器と製作手法・形態共に極めて近いものである。(C)端部調整型とする。貝殻状剝片の尾部周辺の末端部の一部に細部加工の施こされるものである。細部加工は簡略なもので、水平な刃部が特徴的である。(D)石刃折断型とする。背面2稜型の良好な石刃を横折りして、折れ面に細部加工を加えるものである。

以上の各級の組み合わせを見ると、X層段階の御山遺跡では、A類とC類が、IX層段階の池花南遺跡ではA類とB類がそれぞれ共伴している。出口・鐘塚遺跡ではB類が中心となるが、第5図3の基部加工を評価すれば池花南遺跡と同様の組成を示すものとも見られる。D類については技術的基盤が全く異なるので、別系統と考えることにする。

各級の消長に関しては、資料数が少ないので詳細は不明であるが、IX層下部を中心として、A類～C類が推移している状況が窺われる(第13図)。御山遺跡や池花南遺跡の共伴関係から、A類は、B類・C類と組列を構成し、X層からIX層にかけて継的に観察される。B類とC類は並行関係にあることが推察されるに至り、台形石器群内部での技術的属性の変換という問題があらためて呈示されることになった。D類は類例が後田遺跡(麻生 1987)にあるが、小中台(2)遺跡とはほぼ同一層準にあると見られる。IX層上部からVII層にかけては、本地域においてはすでに台形石器は一般的ではなく、剝片製小型ナイフが、台形石器と同一の技術的基盤の上に成立している。この系列と石刃の系列の互換的關係を媒介として、小中台(2)遺跡の石刃石器群が成立するものと考えられる。

- 6) この他に三重県出張遺跡で有孔円礫が出土しているとのことであるが、手元に資料がなく詳細は不明である。
- 7) 第11図及び第12図の遺跡名は次のとおりである。第11図・1、水洞溝・2、峙峪・3、小南海・4、周口店山頂洞 第11図・1、アフォントヴァ山・2、クラスヌィ・ヤル上層・3、同下層・4、ヴシュキ・5、ベルホルンスカヤ山I・

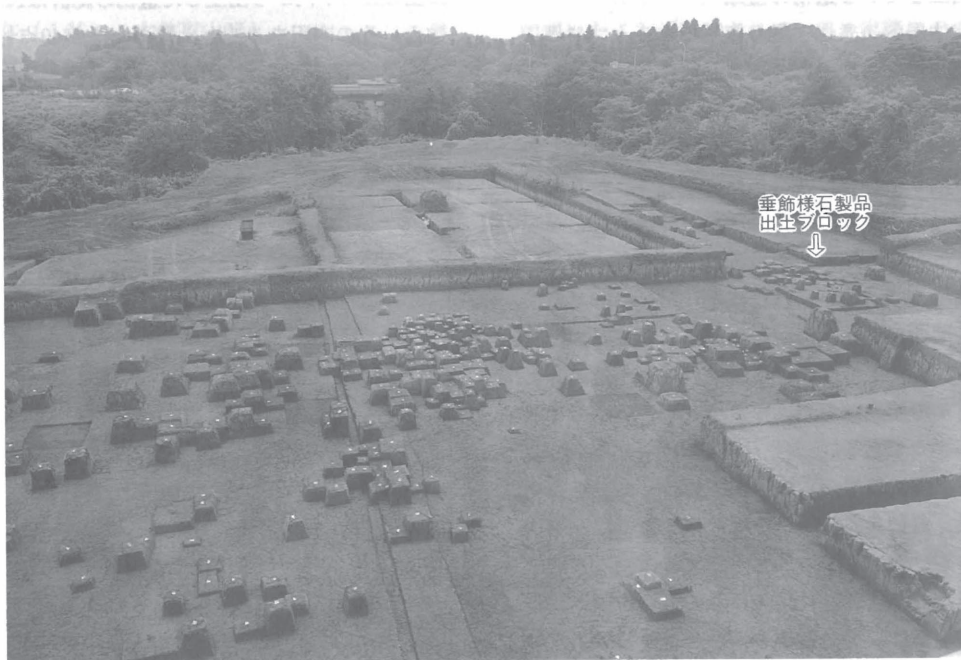
6、同II・7、ココレボII・8、同I・9、コストェンキ17

コストェンキはヨーロッパロシアの出土例であるが、水洞溝と共に本遺跡の垂様石製品と年代的に近いと推定されるため掲載した。装飾品を作る素材には、石の他、獣骨・獣歯、ダチョウの卵殻が用いられている様である。

参考文献(年代順)

- 斐文中「中国の旧石器時代—付中石器時代」『日本の考古学I』1965
- 安志敏「河南安陽旧石器時代洞穴堆積的試掘」『考古学報』第35期 1965
- Медведев, Г.И. Археологические Исследования Многослойной Палеоолитической Стоянки Красный Яр на Ангаре. в1964—1965 гг.(Отчеты Археологических Экспедиций за 1963—1965 годы.) 1966
- Аксенов, М.П. Археологические Исследования на Многослойном Памятнике Верхоленская Гора в 1963—1965 гг.(Отчеты Археологических Экспедиций. за 1963—1965 годы.) 1966
- 賈蘭坡 蓋培 尤玉桂「山西峙峪旧石器時代遺址発掘報告」『考古学報』第37期 1972
- 芹沢長介「大分県岩戸出土の「こけし」形石製品」『日本考古学・古代史論集』伊藤信雄教授還暦記念会編 1974
- ゾコフ(大塚和義訳)「カムチャッカ遺跡ウシュキ4号遺跡おける旧石器時代の住居址」『シベリア・極東の考古学I』1975
- ゾコフ(中村嘉男訳)「カムチャッカ上部旧石器時代」『シベリア 極東の考古学I』1975
- 小野寺信吾 菊地強一「日本旧石器人のふるさと「大台野遺跡」」『国土と教育』33 1975
- 加藤晋平「シベリア」『日本の旧石器文化4』1976
- 飯島武次「中国」『日本の旧石器文化4』1976
- 蓋培 衛奇「虎頭梁旧石器時代晩期遺跡の発現」『古脊椎動物と古人類』15—4 1977
- Мочанов, Ю.А. Древнейшие Этапы Заселения Человеком Северо—Восточной Азии. 1977
- Абрамова, З.А. Палеолитическое Поселение Красный Яр наАнгаре. (Древние Куль туры Приангарья.) 1978
- 金牛山連合発掘隊「遼寧营口金牛山旧石器文

- 化的研究』『古脊椎動物与古人類』16-2 1978
- 杉原重夫 細野衛 大原正義 「星谷津遺跡の自然地理」『佐倉市星谷津遺跡』 1978
 - Абрамова, З.А. Палеолит Енисея • Кокоревская Культура. 1979a
 - Абрамова, З.А. Палеолит Енисея • Афонтовская Культура. 1979b
 - Праслова, Н. Д.п. Рогачева, А.Н. Палеолит Костенковско-Боршевского Района на Дону 1879—1982.
 - 坂田邦明 『大分県岩戸遺跡—大分県清川村岩戸における後期旧石器文化の研究—』 1980
 - 田村隆「復山谷遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VII』 1982
 - 橋本勝雄「立川ローム層の層序区分」その現状と課題—下総台地の場合』『研究連絡誌』第5号 1983
 - 鈴木定明「ローム層の層序区分と分析について」『研究連絡誌』第10号 1984
 - 橋本勝雄『八千代市権現後遺跡』 1984
Борсковский, П. И. Палеолит СССР. (Археология СССР.) 1984
 - (財)北海道埋蔵文化財センター『湯の里4遺跡』 1985
 - 麻生敏隆 『後田遺跡』(旧石器編) (財)群馬県埋蔵文化財事業団 1987
 - 桑月鮮 梶原洋「シベリア・極東の旧石器時代芸術」『考古学ジャーナル』275号 1987
 - 千葉県文化財センター 『千葉県文化財センター年報』No.12 1987
 - 千葉県文化財センター 「四街道市池花南遺跡・御山遺跡・出口・鐘塚遺跡」『昭和62年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』 1988
 - 佐藤宏之 「台形様石器研究序説」『考古学雑誌』第73巻3号 1988
 - 鈴木定明「ローム層の層序区分と分析について」



遺物出土状況（北側）